

リス類の輸入・流通、飼育実態、及び遺伝的攪乱等について

1. 輸入・流通

少なくとも 40 種類の外国産リス科の動物がペット用などを目的として輸入されたことがある（柳川，2000）。平成 15 年度の輸入統計では年間に 37,919 匹（プレーリドッグは省く）が輸入されており、特に中国からの輸入が多かった。

表 1 平成 15 年（輸入統計から） リス類の日本への輸入

| 国 | 頭数 |
|------|--------|
| 中国 | 35,776 |
| カナダ | 1,050 |
| アメリカ | 770 |
| タイ | 250 |
| オランダ | 73 |

事務局による輸入業者へのヒアリングから、中国から輸入されるリス類の約 80~90% がシマリスであり、シマリスの輸入量は年間で約 30,000 匹に達すると推定できる。

様々なリス類が輸入され流通しているが、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（感染症法）」の改正によって平成 17 年 9 月からは、「動物の輸入届出制度」が開始され、リス類を含むげっ歯目の輸入に際しては、その動物が出生した施設の輸出国政府による指定が必要となり、また、野生個体の輸入はできなくなることから、輸入数が減少すると考えられている。（プレーリドッグは感染症法施行令によって既に輸入が禁止されている）。

2. 飼養実態

リス類の飼養実態については不明な点が多いが、約 1000 名（1,099 名）を対象としたアンケート（事務局実施）では、1 世帯のみがキタリスを飼育中と回答し、同様に 1 世帯が以前に飼育したことがあると回答した。シマリスに関しては 2 世帯のみが飼育中と回答したが、以前に飼育したことのある世帯は 50 件に達した。また、シマリスを過去に飼育したことのある回答者によると、飼育年数は数年（半年から 3 年）が多く、16% は、シマリスを逃がしてしまったと回答している。

シマリスの寿命は 7 年から 10 年であるが、アンケートの結果、多くの飼育者は数年でシマリスを死亡させるか、逃がしてしまうケースが多いことが判明した。実際の飼育数を把握するのは難しいが、輸入統計とアンケート結果から推測するとシマリスについては数万匹（3 万~10 万匹）は飼育されていると推定できる。また、キタリスの飼育数はそれよりかなり少ないと考えられる。

3. 遺伝的攪乱に関して

日本に持ち込まれるリス類で、在来種と遺伝的な攪乱（交雑）が問題となりうる種は、シマリス、タイリクモモンガ、キタリスの 3 種である。これらのリスに関する遺伝的研究は、Oshida et. al (1996/2005) や Oshida and Masuda (2000) が詳しい。

これまでの研究によると、キタリスはエゾリスとも交雑が懸念されるのみならずニホンリスとの交雑も懸念されている。ニホンリスとエゾリスの塩基配列を考察した研究などからも、両種は遺伝的に近い種とされている（Oshida and Masuda, 2000; Oshida et. al 1996）。

またタイリクモモンガも同様にエゾモモンガとの交雑が懸念されるが、エゾモモンガの遺伝的な特徴は、古い時期に隔離され形成されたものであり、タイリクモモンガの亜種の中でも特異性が強いものとされている（Oshida et. al 2005）。一方でシマリスについては、このようなキタリスとタイリクモモンガに認められるような遺伝的な研究が非常に少ない。

4. その他

キタリス、タイリクモモンガに関しては、北海道での固有亜種との遺伝的な攪乱を危険視するのみならず、北海道以外でも在来種との生息空間の競合などが危惧されている。キタリスはニホンリスと外見が類似するのみならず、生息に必要な餌資源や生息空間も類似する。同様に、タイリクモモンガは本州以南ではモモンガとの競合が懸念されている。

北海道以外の都道府県では、シマリスが既に狩猟鳥獣となっており、稀に野外で確認はされているが、その定着については不明確な点も多い。

主な参考文献

- (1) Oshida, T and Matsuda, R. (2000) Phylogeny and zoogeography of six species of genus *Sciurus*, inferred from cytochrome b gene sequences, *Zool. Sci.* 17:405-409.
- (2) Oshida, T. Abramov, A., Yanagawa, H., and Masuda, R. (2005) Phylogeography of Russian flying squirrel (*Pteromys volans*): implication of refugia theory in arboreal small mammal of Eurasia, *Molecular Ecology*, 14:1191-1196.
- (3) Oshida, T. and Matsuda, R. (1996) Phylogenetic relationships among Japanese species of the Family *Sciuridae*(Mammalia, Rodentia), inferred from nucleotide sequences of mitochondrial 12s ribosomal RNA genes, *Zool. Science*, 13:615-620.
- (4) 繁田真由美・押田龍夫・岡崎弘幸 (2000) 狭山丘陵で発見されたキタリスについて, *リスとムササビ* 7:6-9(8)